

生物多様性 環境教育

内山 クリスマス
(うちやま くりすます)

京都に拠点を置く総合地球環境学研究所 (RIHN) のテクニカルスタッフ。また、神戸大学大学院農学研究科の博士課程に在籍し、九州におけるスギの生長に関する研究を行っている。主な関心は年輪年代学、気候が樹木に与える影響、生態系の持続可能性。



コロナ禍からの 国際的潮流

生物多様性の損失を止め、回復軌道に乗せる「ネイチャーポジティブ」の実現のために、環境教育は、どんな役割を担えるのでしょうか。

最終回となる今回は、昨年度の国際会議とこれからの環境教育の可能性について、内山様にお話を伺いました。

コロナ禍以前より、自然と人が共存する都市「バイオフィリック・シティ」(Beatley, 2011)の必要性や、自然体験の欠如による健康リスクの上昇、環境保全への参加動機の欠如といった課題を含め、自然とのふれあいの重要性は意識されてきました。コロナ禍以降は、人権としての

環境権に関する国連の決議があり、環境汚染などの問題のない清潔な生活環境だけではなく、持続可能な自然へのアクセスを保障することが、人にとって必要不可欠な権利としてとらえられるようになっていきます。

2024年10月と2025年2月に開催された「生物多様性条約第16回締約国会議(COP16)」では、以下のよう

な重要な決定がなされました。

また、2024年10月に行われた「生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム(IPBES)」では、国連が掲げる2050年の生物多様性ビジョンの達成に向け、社会・経済・文化といった社会システムを統合的にとらえ、根本から見直す「変革的な変化」と、「統合的アプローチ」の必要性が強調されました。

- 1 生物多様性回復の実現に向けて、世界的および国家的な進捗を測定する包括的な指標セットの承認
- 2 生態系、植物、動物、人間の健康を総合的にとらえる「One Health」の考え方に基づく「生物多様性と健康に関するグローバル行動計画」を策定
- 3 優れた環境教育の実践例を世界的に共有する仕組みの設置
- 4 先住民・地域住民の参加を促進する支援策の導入

これらの動きは、地域での取り組みと、国際的なイニシアチブを繋ぐ原動力となっていくで

これらのことは、人の暮らしと生物多様性を切り離して考えるのではなく、一体として捉える必要があることを示しており、自然は贅沢品ではなく、人間の基本的な権利であり、日常生活や産業から切り離された存在ではなく、ともにあるべきものだという認識への転換を後押しするものです。

「自然との共生」は、日本に古くからある「里山」の概念とも重なります。しかし、現在の



上：ニホンミツバチの養蜂文化研究者：眞貝理香講師による講義
中：竹林の整備と竹籠づくりのワークショップ風景
下：民家の屋根の材料になる茅の収穫



日本では、地方の過疎化と都市部への人口集中の影響により、自分自身の風景や土地とのつながりを失うという課題が顕在化しています。

民家を軸に 里山と生物多様性を学ぶ

私が暮らす神戸は、大都市でありながら海と山が近く、里山的な景観が残る土地です。人と自然、都市と農村の関係性を見直す必要がある今、この環境で、自然と人との「ともにある」場を作りたいと考えました。

私たち「つちとひと」は、経験や体験、人・動物・モノと

の関係など、「所有できないものを所有する」（岡部2021）という考えを大切にしながら、自分の可能性や役割、情熱を見つめなおし、その土地でならでの自然体験を学び、紹介することを目的としたグループです。

神戸に近接する丹波篠山市の村で、学生や地域住民と共に、古民家を拠点とした活動を行っています。現在は、里山の放棄地や空き地を活かしながら、森林や農地、河川や茅場、そこに生息する生物と人をつなぐ実践を始めています。その中で、里山の管理拠点としての古民家の在り方や、土地の価値を新しく

引き出すシステムを模索しています。多様な知識と専門性が交わることで、人と自然、都市と農村の関係の再構築が可能になると考えています。

今後は、より多くの人々が将来への志を見つめなおし、暮らしとにある生物多様性を学べる開かれた場として、この場を展覧させていく予定です。

「ともにあること」の 価値の再考へ

自然やその土地の風景に親しみを持つ感覚は、体験を通してこそ育まれると感じています。

かつて私が暮らしたフィリピンでは、小さな従兄弟やその友人たちとともに、自然観察や絵を描くワークショップを行っていました。植物や昆虫、山や空を見て描く中で、子どもたちは驚くほど熱心に自然と関わっていました。自然への関心は、知識だけではなく、体験やアートによつ

ても育まれるということを実感しました。里山での活動でも、参加してくれた人たちの心に、人や自然へのまなざしの「種をまく」ことができたのではないかと思います。

荒廃が進む里山や、空き家が増える風景を見るたびに、この土地に根差した物語も失われてしまうのではないかとこの寂しさを覚えます。その土地の生物多様性や文化、人と自然の循環、そしてその背景にある物語を未来に残していくためには、変え続ける環境との付き合い方を見つめなおす必要があります。

人と自然が「ともにあること」の価値や喜びを見直し、そこから暮らしや仕事、教育の在り方を実践的にデザインすることが、これからの鍵となりそうです。人々が心ゆたかに関わり合いながら、自然と共に生き生きと発展していく方向性を考え、実践していきたいです。

参考文献

Beatley, T. (2011) Biophilic cities: integrating nature into urban design and planning. Island Press.
岡部明子他 (著) (2021) 住まいから問うシェアの未来：所有しえないもののシェアが、社会を変える、学芸出版社。